



町の拠点



川崎ゆきお

町の拠点となっている喫茶店がある。

「親父が商店街の会長を一度だけやったんだ。それがいけなかったんだ。そうじゃなければ、こんなところで喫茶店なんてやってないよ」

オーナーが語り出す。

最近常連客に愚痴ることが多くなっている。客が少なく、アルコールが入っているときだが。

「十年以上なりますねえ」

「そうだねえ。十年じゃ新しい方だよ。もっと古い喫茶店がいくらかあったんだが、残っているのは少ないよ」

「そんな時期に、どうして喫茶店を始めたのですか」

「だから、親父だよ。下手にこの辺の世話役になったからだよ。まあ、その遺産だな。この土地も建物も。それに人脈もね。でもねえ、商店街の人脈だから、死んでる店が多いんだ。もう親父の代から店を畳み始めていたし」

「僕の子供の頃、こんなところに商店街があるのかと、感じたことがあります」

「感じた？」

「はい。人通りが殆どないような場所なので」

「大きなお寺さんがあるだろ」

「ありますねえ」

「その参道だったんだ、昔は。だから、一番賑やかな場所だった」

「でも駅から離れていますね」

「昔は、そんな駅とか鉄道とかはなかったよ」

「それで、僕もこの町に住んでいるのに、気付かなかったんです。この通りを」

「そのお陰じゃないけど、商店街として、もう終わっていたお陰で、駅前開発の波に乗れたんだ」

「駅から離れています」

「文化地区にしたかったんだらうねえ。家屋も古いし、近くの家も古い。取っ払えば大きな建物も建てやすい」

「そうですねえ。大きなホールや施設が固まっていますねえ。ここ」

「そうだろ。高層マンションの下へ行ったかい？」

「はい」

「一階は最新のテナントが入っているだろ。世界中の料理が食べられるよ。昔は大衆食堂かお好み焼き屋しかなかったんだけどねえ」

「はい」

「親父の人脈はその時代のものだから、私の時代は、そういった新しいテナントや、新しい店の人がメインなんだ。だから、下駄屋の親父なんかは無視だ」

「まだ、下駄屋があるのですか」

「この商店街の離れにね、開発を免れた。まだやっている。その横は提灯屋だ」

「僕が思うに、そちらの方が面白そうなんですが」

「そうなんだよなあ。しかし消えゆくところと人脈があっても仕方がない」

「はい」

「それでね。商店街は消えたんだが、まだあるんだよ」

「他から入ってきた人向けですね」

「私のこの喫茶店も、ニュータイプだし開発後だから、折り合いはいいんだ。喫茶店じゃなく、カフェだしね。ここ」

「はい」

「それに地元だし、親父からの人脈もまだあるしで、いつの間にか顔になってしまった」

「この町でイベントをやるなら、このカフェで相談したらいいと、みなさん言いますよ」

「ありがとう。まあ、それがやりたかったんだけどねえ」

「やっておられるじゃないですか」

「そうなんだけどねえ。十年やるとねえ」

「何か」

「静かに下駄屋をやっていた方がよかったと思うことがあるよ」

「え、ここは、下駄屋だったのですか」

「洋品店だ。しかし、下駄も売っていた。何でも屋だ。全く専門性のないね」

「お寺参りにの参道だったからですね」

「鼻緒が切れたときとか、役だったんだろうねえ。大昔は」

「はい」

「それで、何だった。君は」

「はい、イラスト展をやりたいと思ひまして」

「あ、そうなの。絵は持ってきましたか」

「はい、竹中さんからの紹介で」

「ああ、そうなの。じゃ、どんどん決めていきましょう」

「はい」

オーナーが気にしているのは、人脈から離れた人が、寄りつかないということだ。
これは、愚痴らなかつた。

了